

その危機に、わたしたちを守る六百三十の消防魂

消防団は、消防組織法に基づき消防機関であり、普段は仕事をしている一般市民で構成され、非常勤の地方公務員として消防業務に従事する。町で一番身近な守り人だ。わたしたちの生命、身体、財産を守るために、火災などがあれば日中でも夜中でも駆けつける消防団員。先日行われた操法大会をベースに消防団の防災に対する思いや意識に迫る。



受け継がれる最強の操法DNA 大津町消防団 第3分団

今年の町消防操法大会で10連覇を成し遂げた第3分団。その強さの秘密はどこにあるのだろうか。そしてその強さの先に何を掲げているのだろうか。分団長に話を聞いた。



大津町消防団 第3分団長
境敏伸さん

「今回、町の操法大会での10連覇はともうれしかったんです」境分団長は郡大会優勝よりも町大会優勝の方がうれしかったと話す。10連覇とはキリの良い数字だ。相当なプレッシャーもあっただろう。しかし3分団員全員の伝統を守る気持ちが10連覇を成し遂げたのだろう。3分団では、選手希望者が1カ月ほど練習を行ってから選手を決める。基本的には大会未経験者から選出する。操法競技はポンプの操作技術習得が目的であるからだ。「消防団というのは操法大会がすべて

ではないので、優勝すれば嬉しいけど、それ以上に操法を通じて、消防の活動に積極的に参加する人が増えることが本来の目的ではないかと思っています」操法競技を通じて、団結力が高まり、消防活動を円滑に行うことができる。3分団の団結力の秘密はここにある。「仕事や家族を守るために消防がある」ということを団員には言っています。仕事と家庭を両立してきた境分団長だから言える言葉だ。その意識高きDNAは今後も3分団の中で脈々と受け継がれていくのだろう。



消防活動の新たなきっかけ 分団旗に馳せた思い 大津町消防団 第5分団

快挙だった。大津町消防操法大会の成績発表で読み上げられた「第3位 第5分団」の名前。これまでの努力と苦勞が実った瞬間だった。町の中心部で構成される第5分団が入賞したのは操法大会、通常点検を合わせたも初めてのことで、その後の菊池郡消防団操法大会も初出場になる。何もかもが初めての体験に団員たちはそれぞれの思いと考えを交わした。その模様を分団長と指揮者の視点で覗いてみる。

父の背中を見て、学んだ消防魂

指揮者として自分が憎まれても、消防の魂が受け継がれていけば良いと思いました。父も消防団員でした。父の背中を見て育ってきたから、もっと消防というものを考えて欲しかったんです。みんなのサポート、選手たちの努力で3位という結果を得ることができましたが、今回の成績よりも今後良い成績を残していくことが大切だと思っています。「やればできる」ということは、操法競技だけではなくすべてに言えることだと思っています。



指揮者
佐藤純一さん



大津町消防団 第5分団長
境田薫さん

岐阜県生まれの境田分団長が大津に来たのは21歳の秋。消防団に入ったのは11年前、昨年から分団長を務めている。今回の3位入賞は分団長も驚いたという。「町の大会を目標にやってきました。その後の郡大会は考えていなかったもので、今まで郡大会に出たことがないのだ。何をしても良いか分からない。不安とともに始まった郡大会への練習だった。「指揮者の佐藤くんにはまだ勢いがあつたんですが、選手たちが戸惑ってしまったんです」町の大会がゴールと思っていた選手や団員たちは、これからの練習に不安を隠せなかった。練習期間も長くなると怪我の心配もつきまとう。指揮者と団員の思いのギャップに挟まれることになった境田さんは分団長として分団のためにパランスを取った。「すべての団員に目を配りながら、同じ気持ちを持って進んでいくことが大切だと思ったんです」その苦勞は想像以上のものだったと話す。郡大会が終わり、安堵とともに感じたのは団員のつながりが強くなったことだった。「活動をしていなかった団員が



参加してくれるようになったんです」一つのことをみんなでやったこと。そこに人の連帯感が生まれた。最近では老人ホームや各施設に積極的に訪問しているという。消防団は地域のヒーローであれ。境田分団長の言葉が団員の心に刻まれていく証だ。選手たちに自信を持たせてくれた佐藤くんにも感謝しています」と言う分団長、今大会で得たことはこれからの5分団に生かすことができるはずだ。操法大会をきっかけに5分団の新たな活動が始まった。